

# 岐路に立つ沖縄(下)

——翁長派保守の模索——

(敬称略)

ノンフィクション作家

三山 喬

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。著書に『ホームレス歌人のいた冬』『一寸のペンの虫』(ともに小社刊)、『夢を喰らう キネマの怪人・古海卓二』(筑摩書房)など。

四月の連休前、膝臓の腫瘍切除手術を受けた沖縄の翁長雄志知事は、五月十五日、ようやく退院して報道陣の前に姿を現した。

当面の登庁は週一回、体力の回復に合わせて少しずつ通常勤務に近づけるといふ。表情には晴れやかな笑みも見られたが、明らかに痩せ細ったその姿に、支持者の間には動揺も広がった。知事選への意向を聞く記者の質問には、「二日二日、しっかりと公務をやることで県民の判断に委ねたい」と答えただけ。出馬するの、かしないのか、そのニュアンスを読み取れる回答ではなかった。

そんな先行き不透明な状況下、地元政界はさまざまに動いている。

の前副知事・安慶田光男が主宰する集まりにまで顔を出し、その動きはさまざまに憶測を呼んだ。

革新政党や労組などをつくる県知事選調整会議は、翁長の体力回復を待ち、出馬要請を先延ばししている。「オール沖縄会議」を離脱した県内の土木・小売り企業「金秀」やホテル観光業「かりゆし」などは、革新とは別に保守中道支持団体の組織化を目指す。

そして二十七日、県議会与党中道会派「おきなわ」とこれら企業グループが「翁長知事を支える政治・経済懇話会」を設立した。結成総会には、那覇市や南城市などの市町村長や県内全域の保守中道市町村議員、そして百社を超す企業の代表者が集まったとされる。前回の記事でも触れたように、秋の知事選は保守中道票の取り込みがカギを握っている。このところ反基地運動に停滞感が漂うのは、四年前、保革共闘で勝利した翁長陣営のうち、保守中道の勢力が弱体化、革新オシリーの「片肺飛行」になりつつあることが原因とされるためだ。

その象徴的な現象が、前回の知事選で那覇市長だった翁長を擁立した那覇市議会の自民党会派「新風会」が、十二議席の集団から急激に縮小し、議長選をめぐ

## 保守中道票の行方がカギ

県政奪還を目指す自民党県連は、五月二十日、第三回の候補者選考委員会を開き、自薦他薦十数人の一次候補者を月内にも四人程度に絞り、六月上旬をめどに最終決定する方向で合意した。

その前日には、菅義偉官房長官が泊りがけで沖縄入りしている。米軍補給基地・キャンプキンザーの外周部、国道沿いの三ヘクタールを返還する式典に出席するためだが、それ以外にも、自民党県連幹部との意見交換会や北部十二市町村長との会合にも出席。教員採用試験での口利き疑惑で昨年一月に退任した翁長側近

の内紛や市議選惨敗の末、事実上消滅したことだ。

翁長を支援した自民党離脱勢力は、それほどまで支持層に見放されてしまったのか。

四年前の時点では、保守中道の有権者にも、反辺野古の世論は広がっていた。そのことは知事選の結果や世論調査にも明らかだ。その後、政権による強圧的基地建設があらからさまになったとはいえ、一度は反基地に振れた民意がこれほど極端に「自民回帰」するものか、私はその内実を理解できずにいた。

たとえば、新風会のリーダーで市議会議長にもなった金城徹は、昨夏的那覇市議選で落選、現在は県レベルの保守系市町村議の組織「新しい風・にぬあぶし(沖縄方言で北極星の意味)」の代表になっているが、その胸にもはや議員バッジはない。

振り返れば二〇一三年秋までは、自民党県連もオール沖縄の一角を占めていた。「辺野古反対」の公約を突然、反故にして有権者を裏切ったのは県連であり、最後まで筋を通したのが新風会ではなかったか。二十年前、革新の大田昌秀が保守の稲嶺恵一に知事選で敗れた際、自民党は「県政不況」というキャンペーンで成功した。基地問題で政府と対立したがゆえに、沖縄